

サマータイム

寒い部屋

summertime
cold room
megumi miura

三浦 恵

三浦 恵

summer time
cold room
megumi miura

サマ
マ
ー
タイ
ム
寒い部屋

河出書房
科学協

河出書房

三浦 恵 (みうら めぐみ)

1966年、和歌山県生まれ。

'92年、『音符』で第29回文藝賞受賞。

サマータイム/寒い部屋

1995年 6 月 1 日 初版印刷

1995年 6 月10日 初版発行

著 者 三浦 恵

装 丁 泉沢光雄

写 真 新津保建秀

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2 -32- 2

電話：03-3404-1201(営業) 03-3404-8611(編集)

振替口座 00100-7-10802

印刷 大日本印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

©1995 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4 -309 -00978-6

目次

サマータイム
5

寒い部屋
105

サマータイム／寒い部屋

サ
マ
ー
タ
イ
ム

その女は、黒く焼けた細い腕を肘から水平に保ち、背筋をぴんと伸ばして、目の前を横切つてゆく。歩を踏むごとに、古い板張りの床がきしきし鳴る。腕の先には大きな盆が載せられ、その上に並ぶさまざまな形のグラスが、涼しげに響き合う。トタンで覆われた屋根は、淡い影をこのレストラン全体に落とし、女の盆の銀色が鈍く目をかすめる。女の体を影にして、その向こうには、強い日射しに金色に輝く砂浜が見える。その先に、青い海が彼方まで遠く静かに広がっている。波間が時々白く光る。浜辺に近づく波の音が、繰り返して聞こえてくる。

去年の夏も、限りなくよく似た光景を見たと思う。僕は煙草に火をつける。煙が目の前で細く立ち昇る。女は背を向け、浜辺に面したテーブルの前で足を止める。一組の男が向かい合つて座っている。女は体を曲げ、片手でテーブルの上にグラスを下ろして

ゆく。浜辺からの光に、中の液体が透き通って見える。背中に描かれた色あせたランニングシャツの形。骨の浮き出た貧弱な肩。細い腕。客の男が、女を見上げて何かを問う。女はうなずく。長い首。短く刈られた髪。てっぺんが光に透けて、薄い金色に見える。

女はくるりと振り返り、またこちらへと歩いてくる。低く下ろした盆に反射した淡い光の帯が、天井に揺れる。膝もとをかすめて揺れる布きれのようなスカートから、細い脚が伸び、交互に運ばれる。サンダルの隙間に足の指がのぞく。

僕は手を上げる。指先の煙草の灰が、テーブルの上に落ちる。女は視線をぼんやりとさまよわせ、ぼつりぼつりと足を運んでいる。

「すみません——」

女はかすかに体を震わせ、表情をやや硬くする。瞬間に視線が僕に定まる。しっかりと僕を見すえ、それから足を踏み出して、まっすぐにこちらへと歩いてくる。

足音が消え、僕の目の前に両足がそろろう。そのまま体を辿ると、やがて女の顔が静かに映る。無言のまま、細い目が僕を見下ろしている。

「コーヒーを」

「はい」

女は再び、僕の目の前をさつきとは反対の方向へ歩き出す。無表情な横顔。影のせいではなく、女の顔には、黒にも近い濃い色が張りついている。繰り返して太陽に晒され、それを受け入れるうちに、重ねられ、沈んだ色。首にも腕にも脚にも同じ色が重く均等に染みこんでいる。女は覚えていない。覚えているはずもないのだ。それだけの長い時間の中のわずかな断片など。

女は厨房に消える。四角く口を開けたその奥はさらに暗く、その中に埋もれてしまつたかのように、その体はふつと見えなくなる。

さつき女が給仕したテーブルのグラスには液体が半分ほど残り、それをさむ男女は、同じように肘をついて海の方向へと視線を向けている。太陽の光が強く浜辺にまき散らされている。額に汗が滲んでくるのがわかる。熱が少しずつふくらみ、空中にこもり始めている。

彼女はまだ起きてこない。僕らのコテージの窓は、まだ厚いカーテンに覆われている。昨夜遅くここに着いた時、彼女は、——あなたから聞いてた通りだわ——と声をあげた。タクシーのドアが開いた瞬間に生温い潮風が皮膚にからまり、押し寄せる波の音が、何も見えない海の方角から耳の奥底へ流れこんできた。天からは月光がひたひたと降り、

彼女の肌は、まるでそれを吸いとったかのように、青白く見えた。——明日からがもっと楽しみね——。空をあおぎ、全身にその光を浴びるようにして彼女は言い、その声が、澄んだ空気の中に高く響いた。

ここに来ようと言ったのは、彼女だ。結婚した頃、僕がこの場所のことを語ったのだという。

——覚えてないの？ あの雪の日よ。あなた、言ってたでしょう。南の島のはずれにあるコテージのこと。去年の夏過ごしたっていう——。

東京中に大雪が降ったあの日のことだ。確かちようと休日で、僕らは一日、部屋の中で過ごしていた。隅々までストーブの温さが満ち、低く音楽が流れていた。僕は窓辺で、凍りつくような外の風景を眺めていた。辺りは次第に暮れなずみ、雪の白い斑点がくつきりと浮かび上がって見えた。

——あなたはずっとそうして窓の外を見てたわ。それから振り返って、私に言ったの。不思議なものだ、こんな日に夏のことを思い出したよ、って——。

確かに僕は、その時、思い出したのだ。ふっと目の前に、雪の風景の中に、真夏の記憶が生々しくよみがえった。ほんの何日かを過ごしただけの、地味な田舎のコテージ。

その時が初めてだった。それまで、思い出したことなど一度もなかったのに。

——そしてあなたは話してくれたわ——。

そうして彼女は、ここで夏休みを過ごしたいと僕にせがんだ。

——同じ夏を過ごしてみたいの——。

僕はそれにうなずいた。うなずいてしまったのだ。もう二度と来ることはないだろう、去年の夏、ここを発つ時にそう思ったのに。まるで一杯の水を目の前に差し出されたかのようなだった。僕はそれを飲み干して、喉の渴きを癒したかった。あの冬の日に思い出した時から、僕はここでの夏をいつもどこかで思っていたのだ。

硬質な音が遠くから響いてきて、女の全身が厨房の中から現れる。再びてのひらには盆があり、その上にコーヒークップがひとつ見える。女はそこに視線を落とすこともなく、同じように背筋を伸ばし、こちらへと歩いてくる。

浜辺に面したテーブルの男女が席を立つ。海への視界がすべて開かれる。白い波が沖合からこちらに向かってきていているのが見える。

「お待ちせしました」

つぶやくようにそう告げて、女はソーサーの端をつかみ、テーブルの上へゆつくりと

下ろしてゆく。カップが小刻みに震え、僕の目の前で黒い液体の表面が小さく波うつ。

「ありがとう」

女は軽く頭を下げて、また背を向けて歩いてゆく。途中、厨房の手前で足を止め、そして再び中に消える。

音楽が流れ出す。低く、このレストランの中だけにゆき渡るような音量で、メロディが聞こえる。軽やかなピアノの音色。深く響くベース。高く鳴りわたるトランペット。僕は耳をすます。知っている曲だ。こんなふうに、今までどこかしらで何度も偶然耳にし、いつのまにか覚えた曲。題名は思い出せない。ラジオなのだろう。途中で何度も雑音が覆いかぶさる。

僕は古びたカップを取り、口をつける。熱い塊が舌を焼く。

浜辺に水着姿の人が見える。みるみるうちに、縞模様のパラソルが開かれてゆく。海は何本も細かい横線を引いたように、一面の青の上に白い輝きを浮かばせている。空気はさらに重くなり、皮膚の表面を押しつける。額に汗が滲んでいる。ラジオからのメロディは、ピアノの音色だけになり、ふとした瞬間にそれは途絶える。そしてその余韻を覆うように、違うメロディが流れ出す。顔を上げると、近づいてきた波の音が、耳

のそばまで押し寄せ、強く弾ける。そして再び静かに引いては、またゆつたりと近づいてくる。波の音は続いてゆく。夏。同じ夏を僕はまた繰り返すのだ。

僕を呼ぶ声がある。きつい日射しの中を、彼女が手を振りながら歩いて来ているのが見える。体にぴったりとした白いワンピース。大きな麦わら帽子が顔に濃い影を落とし、その中で赤いくちびるが華やかに開く。重なるように連なるコテージを背に、細い石の道を歩いてくる。真つ黒な小さい影が足もとをついて来ている。彼女は手をかざし、大きく空を見上げる。黒いサングラスが表面に空を映し出す。空には、濃く鮮やかな青が一面に広がり、その下に白く厚い雲がいくつか浮かんでいる。

浜辺のパラソルがまたひとつ広がる。女はテーブルとテーブルの間を静かに行き来している。ラジオからはまた、別の曲が始まる。

「おはよう」

テーブルの前、さっき女が立ったのと同じ位置に、彼女がいる。サングラスにふたつ、小さく背を丸めた僕の姿が映っている。

「すごい暑さね」

荒い呼吸を響かせながら、彼女は僕の向かいの席に腰を下ろす。帽子を脱いで、テー

ブルの上に載せ、口を広げてあらためて僕に微笑みかける。大きく開いた襟ぐり。首もとと白く、柔らかく肉がついている。指がテーブルの中央に伸び、煙草を一本抜き取る。僕の目の前でライターに火が灯る。

「あなた、昨夜はよく眠れた？」

「ぐっすりね」

浜辺で歓声が上がる。波うち際に遊ぶ人々が見える。波しぶきが光っている。

「夜中に、何度か起きてたでしょう」

テーブルの上に肘をつき、彼女は海の方角を見ている。指の間に挟まれた煙草の先から、煙が細く立ち昇っている。

「ああ、何度か目が覚めた。でもよく眠ったよ」

「私もそうよ。あなたが言ってた通りだね。波の音のせいね。あの音、すごく優しく、安らかで、このままだとずっと眠りにおちたままになるんじゃないかって思うの。でも、そう、恐ろしく怖くなるのね、突然。そして目が覚めるの」

「でもすぐに慣れるよ」

「ええ、そう言ってたわね」